

一景話題

泉鏡花

青空文庫

夫人堂

神戸にある知友、西本氏、頃このごろ日、摂津国摩耶山せつつのくにまやさんの絵葉書を

送らる、その音信おとずれに、

なき母のこいしさに、二里の山路をかけのぼり候。鬢たなび

き渡る霞の中に慈光あまね おん洽あき御姿を拝み候。

しかじかと認めしたたられぬ。見るからに可懐なつかしさ言わんかたなし。

此方こなたもおなじおもいの身なり。遥はるかにそのあたりを思うさえ、端麗

なるその御姿おんの、折からの若葉の中に梢こずえを籠めたる、紫の薄衣うすぎぬ

かけて見えさせたまう。

地誌を按ずるに、摩耶山は武庫郡六甲山の西南に当りて、雲
白く聳えたる峰の名なり。山の蔭に滝谷ありて、布引の滝の
源というも風情なるかな。上るに三条の路あり。一はその布引よ
り、一は都賀野村上野より、他は篠原よりす。峰の形峻巖崎
軀たりとぞ。しかも海を去ること一里ばかりに過ぎざるよし。
漣の寄する渚に桜貝の敷妙も、雲高き夫人の御手の爪紅の影
なるらむ。

伝え聞く、摩耶山 忉利天王寺 夫人堂の御像は、その昔梁
の武帝、女人の産に悩む者あるを憐み、仏母摩耶夫人の影像を造
りて大功德を修しけるを、空海上人入唐の時、我が朝に齋き帰り
しものとよ。

知ることの浅く、尋ぬること怠るか、はたそれ詣ずる人の少き
 にや、諸国の寺院に、夫人を安置し勸請するものを聞くこと
 稀なり。

十歳ばかりの頃なりけん、加賀国石川郡、松任の駅より、畦
 路を半町ばかり小村に入込みたる片辺に、里寺あり、寺号

は覚えず、摩耶夫人おわします。なき母をあこがれて、父ととも

に詣でしことあり。初夏の頃なりしよ。里川に合歡花あり、田

に白鷺あり。麦やや青く、桑の芽の萌黄に萌えつつも、北国の

事なれば、薄靄ある空に桃の影の紅染み、晴れたる水に李の色

蒼く澄みて、午の時、月の影も添う、御堂のあたり凡ならず、畑

打つものの、近く二人、遠く一人、小山の裾に数うるばかり稀な

りしも、浮世に遠き思ありき。おもい

本堂正面の階に、きざはし斜めに腰掛けて六部一人、頭より高く笈をさし置きて、寺より出せしなるべし。いだその廚の方には人の氣勢だになきを、日の色白く、うつぱり梁の黒き中に、かれ渠ただ一人洪茶のみて、打うち憩ちやすろうていたりけり。

その、もの静に、しずか謹みたる状して俯向く、背のいと瘦やせたるが、取る年よりも長き月日の、旅のほど思わせつ。

よし、それとても臍おぼろげ氣ながら、かしこ彼処なる本堂と、向つて右の方かたに唐戸一枚隔てたる夫人堂の大なる御廚子の裡に、おおい綾あやの几帳きちようの蔭なりし、ひぎまです跪ける幼きものには、すらすらと丈高う、御髪おぐしの艶つやに星一ツ晃々きらきらと輝くや、ふと差さし覗くかとして、拝まれたまい

ぬ。浮べる眉、画^{えが}ける唇、したたる露の御^{おん}まなざし。瓔^{よう}珞^{らく}の珠
 の中にひとえに白き御胸を、来よとや幽^{かすか}に打^{うち}寛^{くつ}ろげたまえる、
 気高く、優しく、かしこくも妙^{たえ}に美しき御姿、いつも、まのあた
 りに見参らす。

今思出でつと言うにはあらねど、世にも慕わしくなつかしきま
 まに、余^よ所^そにては同じ御堂^{みどう}のまたあらんとも覚え^とずして、この年^{とし}
 月^{しつき}をぞ過^{すこ}したる。されば、音にも聞かずして、摂津、摩耶山の
 忉利天王寺に摩耶夫人の御堂ありしを、このたびはじめて知りた
 るなり。西本の君の詣でたる、その日は霞の霰^{たなび}霰^ききたりとよ。：
 音^{おと}信^{ずれ}の来しは宵月なりけり。

あんころ餅

まつとう
松任のついでなれば、そこに名物を云うべし。餅あり、あん

ころと云う。城下金沢より約三里、第一の建場たてばにて、両側の茶店
軒を並べ、件くだんのあんころ餅を鬻ひきぐ……伊勢に名高き、赤福餅、草
津のおなじ姥うばヶ餅、相似たる類たぐいのものなり。

松任にて、いずれも売競うなかに、何なにがし某というあんころ、隣

国他郷にもその名聞ゆ。ひとりその店にて製する餠あん、乾かず、湿
らず、土用の中うちにても久しきに堪えて、その質を変えず、格別の
風味なり。其家そこのなそこにがし、遠き昔なりけん、村隣りに尋ぬるも
のありとて、一日宵あるひのほどふと家を出でしがそのまま帰らず、搜

ずに処無きに至りて世に亡きものに極^きりぬ。三年の祥^{しやう}月^{がつ}命^{めい}日^{にち}
 の真夜中とぞ。雨強く風烈^{はげ}しく、戸を揺^ゆり垣を動かす、物^{もの}凄^{すさま}
 じく暴^あるる夜なりしが、ずどんと音して、風の中より屋の棟^おに下^お
 立^{りた}つものあり。ばたりと煽^{あお}つて自^{おの}から上に吹開く、引窓の板を片
 手に擡^{もた}げて、倒^{さか}に内を覗^{のぞ}き、おくの、おくのとて、若き妻の名を
 呼ぶ。その人、面青^{おもて}く、髯^{ひげ}赤し。下に寝^いねたるその妻、さばかり
 の吹降りながら折からの蒸暑さに、いぎたなくて、搔^か卷^{いまき}を乗出
 でたる白き胸に、暖き息、上よりかかりて、曰^{なんじ}く、汝^{なんじ}の夫なり。
 魔道に赴^つきたれば、今は帰らず。されど、小兒^{こども}等も不便^{ふびん}なり、活^た
 計^{つき}の術^{すべ}を教うるなりとて、すなわち餡^{あん}の製法を伝えつ。今はこれ
 ままでと云うままに、頸^{くび}を入れてまた差覗^{さのぞ}くや、たちまち、黒雲

を捲まき小さくなりて空高く舞上る。からかさ傘の飛ぶがごとし。天赤かりしとや。天狗相伝の餅てんぐというものこれなり。

いつぞやらん、その松任より、源平島、水島、手取川を越えて、山に入る、辰たつのくち口くちという小さな温泉に行きて帰るさ、件くだんの茶屋に憩いて、児こども心ごころに、ふと見たる、帳場にはあらず、奥の別なる小さき部屋に、黒髪の乱れたる、若き、色の白き、瘦やせたる女、差俯さしうつむ向きて床の上に起直りていたり。枕まくら許もとに薬などあり、病人なりしなるべし。

思わぞつとずも悚然せしが、これ、しかしながら、この頃のものにはあらずかし。

今は竹の皮づつみにして汽車の窓に売子出でて旅客に鬻ひきぐ、不

思議しるしの商標つけたるが彼かの何某屋なにがしやなり。上品らしく氣取りて白
 餡あん小さくしたるものは何の風情もなし、すきとしたる黒餡の餅、
 形おおいも大に趣あるなり。

夏の水

松任まつとうより柏野水島などを過ぎて、手取川を越ゆるまでに源平
 島と云う小駅あり。里の名に因ちなみたる、いづれ盛衰記のひとつくたり一条
 あるべけれど、それは未いまだ考いえず。われ等がこの里の名を聞くや、
 直ちに耳の底に響きたき来るは、松風玉を渡るがごとき清水の声なり。
 夏げの水とて、北国によく聞ゆ。

春と冬は水湧かず、椿の花の燃ゆるにも紅を解くばかりの雫もなし。ただ夏至のはじめの第一日、村の人の寝心にも、疑いなく、時刻も違えず、さらさらと白銀の糸を鳴して湧く。盛夏三伏の頃ともなれば、影沈む緑の梢に、月の浪越すばかりなり。冬至の第一日に至りて、はたと止む、あたかも絃を断つごとし。

周囲に柵を結いたれどそれも低く、錠はあれど鎖さず。注連引結いたる。青く艶かなる円き石の大なる下より溢るるを樋の口に受けて木の柄杓を添えあり。神業と思うにや、六部順礼など遠く来りて賽すとして、一文銭二文銭の青く錆びたるが、円き木の葉のごとくあたりに落散りしを見たり。深く山の峽を探るに及ばず。村の往来のすぐ路端に、百姓家の間にあたかも総井戸のご

とくにあり。いつなりけん、途みちすがら立寄りて尋ねし時は、東家とうかの媼おうな、機織りつつ納戸の障子より、西家さいかの子、犬張子いぬはりこを弄もてあそびながら、日向ひなたの縁より、人懐しげに瞻みまもりぬ。

甲冑堂

橘たちばな南なん谿けいが東遊記に、陸前国苅田郡かったごおり高福寺なる甲冑堂の婦人像を記せるあり。

奥州白石しろいしの城下より一里半南に、才川と云う駅あり。

この才川の町末に、高福寺という寺あり。奥州筋近来の凶作にこの寺も大破に及び、住持となりても食物乏しけ

れば僧も不住、明寺あきでらとなり、本尊だに何方いづかたへ取納めしにや寺には見えず、庭は草深く、誠に狐梟こきようのすみかというも余あまりあり。この寺中に又一ツの小堂あり。俗に甲冑堂という。堂の書附には故将堂とあり、大さおおき纔わずかに二間ばかり四方許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、この小堂の破損はいう迄もなし、ようように縁にあがり見るに、内に仏とてもなく、唯婦人ただの甲冑して長刀ながなたを持ちたる木像二つを安置せり。

これ、佐藤継信つぎのぶ忠信ただのぶ兄弟の妻、二人都にて討死せしのち、その母の泣悲しむがいとしさに、我が夫の姿をまなび、老いたる人を慰めたる、優しき心をあわれがりて時の人木像きざしに彫みしもの

なりという。

この物語を聞き、この像を拝するにそぞろに落涙せり。

(略) かく荒れ果てたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、
彩色も云々うんぬん。

甲冑堂の婦人像のあわれに絵の具のあせたるが、遥はるけき大空の
雲に映りて、虹にじより鮮明あざやかに、優しく読むものの目に映りて、そ
の人あたかも活いけるがごとし。われらこの烈はげしき大都会の色彩を
視ながむるもの、奥州辺の物語を読み、その地の婦人を想像するに、
大方は安達あだちヶ原の婆々ばばあを想い、もつぺ穿はきたる姉あねえをおもい、紺くろの
禪ふんどの媽々かかあをおもう。同じ白石の在所うまれなる、宮城野と云い信し
夫のぶと云うを、芝居にて見たるさえ何とやらん初はつが鰹つおの頃は嬉し

からず。ただ南谿が記したる姉妹のこの木像のみ、外ヶ浜の沙漠
 の中にも緑水オアシスのあたり、花菖蒲はなあやめ、色のしたたるを覚ゆる事、
 巴ともえ、山吹のそれにも優れり。幼き頃より今もまた然りしか。

元禄の頃の陸奥千鳥には——木川村入口に鐙あぶみずり摺すりの岩あり、
 一騎立だちの細道なり、少し行きて右みぎの方に寺あり、小高き所、堂一
 宇うち、継信、忠信の両妻、軍立いくさだちの姿にて相双あいならび立つ。

軍いくさめく二人の嫁や花あやめ

また、安永中の続奥の細道には——故将堂女体、甲冑たいを帯たした
 る姿、いと珍し、古き像にて、彩色の剥はげて、下地なる胡粉ごふんの白
 く見えたるは、

卵うの花や緘おどし毛ゆらり女武者

とするせりとぞ。この両様とも悉しくその姿を記さざれども、一読の際、われらが目には、東遊記に写したると同じ状に見えていと床し。

しかるに、観聞志と云える書には、—— 斎川以西有羊腸、維石巖々、嚼足、毀蹄、一高坂也、是れをもつてうまかいたいをうれう、ひとけんかんをいたむ、おうぼついわゆる、かんざん以馬憂虺隤、人痛嶮艱、王勃所謂、関山こえがたきもの、まさにここにおいてかしんいすべし、どじんやれあぶみのさかとしようす難踰者、方是可信依、土人称破鎧坂、やれあぶみざかのひがしにいちどうあり、なかににじよえいをおく、みにじゅういのふくを破鎧坂東有一堂、中置二女影、身着戎衣、つけ、かしらにえぼしをいただき、うほうにきうしをと、さほうにとうけんをぶす服、頭戴烏帽子、右方執弓矢、左方撫刀劍——とありとか。

この女像にして、もし、弓矢を取り、刀劍を撫すとせんか、い

や、腰を踏張^{ふんば}り、片膝押^{おし}はだけて身構えているようにて姿甚だとのわず。この方が真^まならば、床しさは半ば失^うせ去る。読む人々も、かくては筋骨逞^{たくま}しく、膝節^{ひざぶし}手ふしもふしくれ立ちたる、が、んまの娘を想像せずや。知らず、この方はあるいは画像^{かた}などにて、南谿が目のあたり見て写しおける木像とは違^{たが}えるならんか。その長^{なが}刀持^ぎちたるが姿なるなり。東遊記なるは相違^{あやま}あらじ。またあらざらん事を、われらは願う。観聞志もし過^{あやま}ちたらんには不都合なり、王勃^{おうぼつ}が謂^いう所などはどうでもよし、心すべき事ならずや。近頃心して人に問う、甲冑堂の花あやめ、あわれに、今も咲けるとぞ。

唐土の昔、咸寧^{かんねい}の吏、韓伯^{かんはく}が子某^{なにがし}と、王蘊^{おううん}が子某^{なにがし}と、劉^り

耽^{ゆうたん}が子某と、いづれ華^{かちゆう}胄の公子等、相携えて行^ゆきて、土地
 の神、蔣^{しょうざん}山の廟^{びよう}に遊ぶ。廟中数婦人の像あり、白^{はく}皙^{せき}にして
 甚だ端正。

三人この処に、割^{わりご}籠を開きて、且つ飲^{おおい}み且つ大^{くら}に食^くう。その人
 も無^なげなる事、あたかも妓^{かたわら}を傍^{わら}にしたるがごとし。あまつさえ酔
 に乗じて、三人おのおの、その中^{うち}三婦人の像^{ゆびさ}を指し、勝手^{よりど}に選^え取
 りに、おのれに配^なして、胸^なを撫^なで、腕^おを圧^おし、耳^{みみ}を引く。

時に、その夜の事なりけり。三人同じく夢^{ゆめ}む。夢^{ゆめ}に蔣^{しょうこう}侯^{こう}、
 その伝^{さんだん}教^{けう}を遣^{つか}わして使者^{しや}の趣^{そう}を白^{はく}さす。曰^{いは}く、不^ふ束^{つつか}なる女^を
 ども、猥^{みだり}に卿^{けい}等^らの榮^{えい}顧^こを被^ひる、真^{まこと}に不思議^{ふしぎ}なる御^ご縁^{えん}の段^{だん}、祝^{しゆ}着^{ちやく}に
 存^{ぞん}ずるものなり。就^つては、某^{それ}の日^ひ、あたかも黄^{わう}道^{どう}吉^{きち}辰^{しん}なれば、

揃つて方々^{かたがた}を媚君にお迎え申すと云う。汗冷たくして独りずつ夢さむ。明くるを待ちて、相見て口を合わするに、三人符を同じゆうしていささかも異なる事なし。ここにおいて青くなりて大に^{おお}懼れ、^{おそ}齊しく^{ひと}牲を備えて、廟に詣つて、罪を謝し、哀を乞う。

その夜また俱に^{とも}夢む。この度や蔣侯神、白銀の甲冑し、雪のごとき白馬に^{またが}跨り、白羽の矢を負いて親しく自ら^{みずか}枕に^{くだ}降る。白き鞭^{むち}をもつて示して曰く、変更の議罷^{まかりな}成らぬ、御身等、我が^{むすめ}処女を何と思う、海老茶^{えびちや}ではないのだと。

木像、神^{しん}あるなり。神なけれども霊あつて来り^よ憑る。山深く、里^{ゆう}幽に、堂宇^{はいたい}廃頽して、いよいよ活けるがごとくしかるなり。

明治四十四（一九一）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十八卷」岩波書店

1942（昭和17）年11月30日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、以下の箇所を除いて大振りにつくっています。

安達《あだち》ヶ原の婆々《ばばあ》を想い

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一景話題

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>